

【書評・紹介】

高倉 浩樹 著『極北の牧畜民サハ—進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌』
(京都, 昭和堂, 2012年1月, A5判, 320頁, 5,500円+税)

中田 篤



表紙画像

本書は、市場経済化が進む現在のシベリアで、サハの生業文化と自然環境との関係を民族誌的に明らかにしようと出版された研究書である。

「サハ」は、東シベリアのレナ川流域を中心に生活する民族集団である。周囲の先住民とは異なるチュルク系の言語を持ち、人口は約 44 万人とシベリア少数民族のなかではもっとも大きな民族の一つとされている。主要な居住地であるサハ共和国（ヤクーチア）は、北半球の最低気温が記録されるほど厳しい冬の寒さで知られるが、サハはこの地で牛馬の牧畜を伝統的な生業として生活してきた。寒冷な自然環境、そしてソ連時代の農業の集団化やその後の市場経済導入といった社会的経済的環境変化のなかで、牛馬牧畜は現在も受け継がれている。著者は、牛馬牧畜を中心としたサハの生業が、市場経済に対

してどのように適応してきたのか、10 年以上にわたるフィールドワークで得た資料から明らかにしようと試みている。

本書は序論と結論を含め、全十章から構成されている。順を追って内容を紹介してみよう。

第一章「序論—極北牧畜とマイクロ適応」では、本書の目的や意義、研究方法とともに、キーワードとなる「極北牧畜」や「適応」という語の定義が丁寧に説明されている。前半ではサハの牛馬牧畜を極北という特異な自然環境への適応と捉え、さらに世界各地でみられる牧畜という生業文化全体のなかで位置づけることによって、その特徴と一般性を示している。また、本書の目的が二つ挙げられている。第一に極北牧畜の適応に関する民族誌的記述を通じて現代シベリア少数民族の文化の多様性を生態的な関わりから解明すること、第二に適応・進化の概念を、現代世界における社会文化現象を解明するために活用できるように鍛え直すということである。本章のなかの極北適応や極北牧畜に関する記述は、それだけで北方諸民族が暮らす自然環境やそこで営まれてきた先住民の生業文化に関する概説としても有用なものとなっている。

そして第二章「サハ人とはだれか」では、本書の舞台となるレナ川中流域の自然環境、サハの民族的起源と伝統文化、帝政ロシア植民地時代から社会主義時代にかけての歴史的、社会的状況について概説している。読者はこの章を読むことによって、本書の主人公であるサハが暮らしてきた土地、サハの民族的・文化的・歴史的背景について総合的なイメージを持つことができるだろう。以降の章では、それぞれのテーマごとにサハの生業文化複合に関する民族誌が記述されるが、本章はそのための下地作りといったところであろうか。

第三章「農村の生活と生業複合」では牧畜と狩猟、第四章「氷を利用する生活」では漁撈と氷の利用に焦点を当て、農村地域におけるそれぞれの生業活動の歴史的変化や現状について民族誌的に詳述される。特に第四章では、寒冷な環境ならではのユニークな氷の活用について、凍結した湖などの氷の下でおこなわれる漁撈と飲料水としての氷採取という側面から紹介して

いる。

第五章「タイガのなかの草原と湖」では、タイガの中に点在するアラースと呼ばれる草原でおこなわれる牛飼育、そして冬季の牛の飼料を確保するために不可欠な草刈活動が取り上げられる。そして第六章「草刈と精霊」では、草刈場の利用と所有状況について、資源利用という観点から検討している。草刈場は、夏の短期間は資源（草）を確保する場として個人や集団単位で占有される「なわばり」となるが、それ以外の季節には漁撈や採集が行われる場として一般に開放される。つまり、季節によって資源利用の位相が変化するのであり、そうした状況は帝政ロシア時代、社会主義時代、そして現在まで同様に引き継がれてきたという側面を持つ。

続く二つの章では、サハの馬飼育が詳述される。第七章「極北で放牧される馬」では馬群の行動管理や群の構成、再生産の過程、第八章「馬の委託」では馬の管理と所有が分離している状況と委託関係の実態について取り上げ、それぞれ民族誌的な記述と分析をおこなっている。馬はサハの文化的アイデンティティと結びついた特別な動物で、かつてサハは「馬の民」とも呼ばれていた。サハ共和国では、現在も馬が象徴的な意義を持つとともに、その肉は重要な食物となっている。また、特に周年放牧される馬群の管理については、サハだけでなく中央アジアや北アジアの事例に関しても民族誌的な報告は少ない。そうした点でも、この二章の記述は貴重なものとなっている。

第九章「牧畜生産の市場経済適応」では、ここまでの民族誌的資料や議論を踏まえながら、牛と馬の管理方法やその社会経済的価値の違いを比較しつつ、それぞれが現在のサハの牧畜文化として重要な位置を占めていることを示す。そして、現代のサハ社会は、この二つの牧畜を組み合わせることによって、一方で伝統的生業を強化しながら、他方で同時に市場経済にも対応できるという「二重経済」を生成しているとする。牛と馬の牧畜の特性とその文化的、経済的意味を示した上で、現在のサハ牧畜文化の適応という視点から分析を加えているという点で、この章は本書の核心的な部分と言えるだろう。

そして最終章「結論—進化と適応の視座」では、各章の内容をもう一度整理し、サハの牛馬牧畜をポスト社会主義という新たな環境に対する適応として位置づけていく。さらに、後半では、サハの生業文化の中に二種類の牧畜から成る二重経済が生じた要因やそのメカニズムについて、シベリアの自然環境と歴史的過程を考慮しつつ、マイクロ適応の概念をもちいて論じている。この部分は、本来自然科学的な概念である「適応」を社会人類学に導入し、新たな視座を切り開こうとする著者の分析の枠組を理論的に説明した意欲的な内容になっている。

以上、各章の内容を概観してきた。いくつかの章は独立した論文として個別に発表されたものであるため、一冊の単行本として考えるとやや統一感に欠けるきらいがあるかも知れない。しかし、それによって本書の内容の興味深さや価値が失われるわけではない。読者の興味や関心によっても評価は異なるだろうが、評者は、本書には大きく分けて4つの意義があると考えている。

第一に、本書がポスト社会主義時代のサハの個人や集団の生業活動について詳細に記述した民族誌であるということだ。ソ連崩壊以降、多くの外国人文化人類学者がシベリアに入り、現地調査をおこなってきた。しかし、それでもこの地域の広さやそこに住む多様な民族を考えると、まだまだ研究事例は少ない。本書は現代サハの牧畜文化に関する貴重な記録になっていると言えるだろう。

第二に、サハ社会における馬牧畜を、北方地域の生業文化あるいは世界の牧畜文化のなかに位置づけている点である。北方地域の牧畜といえば、おもにトナカイ牧畜に関心が集まり、サ

ハの牛馬牧畜が取り上げられることは少なかった。また、世界の牧畜研究のなかでも、サハの牧畜が注目されることはほとんどなかったのではないだろうか。サハの馬牧畜の特異性を強調するだけでなく、それをより一般的な概念体系のなかに位置づけることによって、その特徴が明確に描かれていると思われる。

第三に、5章・8章を中心にポスト・ソ連期の農業改革や農業経営組織、土地所有形態など、現代のロシア農業の状況について簡潔に説明している点である。牧畜を含むロシアの農業は、社会主義時代の影響を残しながらも、自由化以降の新しい制度によって営まれており、特にその組織形態はなかなかわかりづらい。本書では、サハの牧畜を紹介する過程で農業組織成立の経緯や実態についても触れられており、現代ロシアの農業形態について理解を深めるという点でも有用と思われる。

最後に、本書がシベリアに暮らす先住民の歴史や伝統文化、現在の生活について、日本語で読むことができる数少ない民族誌という点である。シベリアをフィールドとしている日本人の文化人類学者は少なく、学術論文以外にその研究成果が日本語で紹介されることはほとんどない。このことは、シベリアでもっとも大きな少数民族の一つとされるサハについても例外ではない。本書は「東北アジア研究専書」として位置づけられる専門書であり、特に理論的な部分はやや難解かも知れない。しかし、本書が日本語で書かれたことによって、多くの日本人が比較的容易にサハの生活や文化に触れることができるのである。

本書は2000年に出版されたトナカイ牧畜に関する著作（高倉 2000）に続き、著者のシベリア研究の一里塚とも言える成果である。著者は今も第一線で活躍する現役のフィールドワーカーだが、最近では活動の幅を広げ、文理融合のプロジェクトなどにも関わっている（高倉編 2012 参照）。著者の研究がどのような方向に発展していくのか、今後も注目していきたい。

参考文献

高倉浩樹

2000 『社会主義の民族誌 シベリア・トナカイ飼育の風景』東京都立大学出版会

高倉浩樹編

2012 『極寒のシベリアに生きる トナカイと氷と先住民』新泉社

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館)